

与謝野晶子 訳

# 源氏物語

東屋卷



一冊堂青空文庫



源氏物語

東屋

紫式部

與謝野晶子訳

ありし世の霧来て袖を濡らしけりわり  
なけれども宇治近づけば  
(晶子)

源右大將は常陸守ひたちのかみの養女に興味は覚えながらも、しいて筑波つくばの葉山しげやま繁山を分け入るのは軽々しいことと人の批議するのが思われ、自身でも恥ずかしい氣のされる家であるために、はばかりて手紙すら送りえずにいた。ただ弁の尼の所からは母の常陸夫人へ、姫君を妻に得たいと薰かおるが熱心に望んでいることをたびたびほめかして来るのであったが、真実の愛が姫に生じていることも想像されず、薰のすぐれた人物であることは聞き知っていて、この縁談の受けられるほどの身の上であつたならと悲觀を母はするばかりであつた。

常陸守の子は死んだ夫人ののこしたのも幾人かあり、この夫人の生んだ中にも父親が姫君と言わせて大事にしている娘があつて、それから下にもまだ幼いのまで次々に五、六人はある。上の娘たちには守が骨を折つて婿選<sup>かみ</sup>びをし、結婚をさせているが、夫人の連れ子の姫君は別もののように思つて、なんらの愛情も示さず、結婚について考<sup>おも</sup>えてやることもしないのを、妻は恨めしがつていて、どうかしてすぐれた良人<sup>おとこ</sup>を持たせ、姫君を幸福な人妻にさせてみたいと明け暮れそれを心がけていた。容貌<sup>ようぼう</sup>が十人並みのものであつて、平凡な守<sup>かみ</sup>の娘と混ぜておいてもわからぬほどの人であれば、こんなに自分は見苦しいまでの苦勞はしない、そうした人たちとは別もののように、もつたいない貴女<sup>きじよ</sup>のふうに成人した姫君であつたから、心苦しい存在なのであると夫人は思つていた。娘がおおぜいいると聞いて、ともかくも世間から公達<sup>きんだち</sup>と思われている人なども結婚の申し込みに来るのがおおぜいあつた。前夫人の生んだ二、三人は皆相当な相手を選んで結婚をさせてしまった今は、自身の姫君のためによい人を選んで結婚をさせるだけでいいのであると思ひ、明け暮れ夫人は姫君を大事にかしづいていた。守も賤<sup>いや</sup>しい出身ではなかつた。高級役人であつた家の子孫で、親戚<sup>しんせき</sup>も皆よく、財産はすばらしいほど持つていたから自尊心も強く、生活も派手<sup>はで</sup>に物好みを尽くしている割合には、荒々しい田舎<sup>いなか</sup>めいた趣

味が混じっていた。若い時分から陸奥むつなどという京からはるかな国に行っていたから、声などもそうした地方の人と同じような訛声なまりの濁りを帯びたものになり、権勢の家に對しては非常に恭順にして恐れかしこむ態度をとる点などは隙すきのない人間のようでもあった。優美に音楽を愛するようなことには遠く、弓を巧みに引いた。たかが地方官階級だと輕蔑けいべつもせずよい若い女房なども多く仕えていて、それらに美装をさせておくことを怠らないで、腰折歌こしおれうたの会、批判の会、庚申こうしんの夜の催しをし、人を集めて派手はでに見苦しく遊ぶいわゆる風流好きであつたから、求婚者たちは、やれ貴族的であるとか、守の顔だけが上品であるとか、よいふうにはばかりしいて言つて出入りしている中に、左近衛少将さこんえで年は二十二、三くらい、性質は落ち着いていて、學問はできると人から認められている男であつても、格別目だつ才氣も持たないせいで、第一の結婚にも破れたのが、ねんごろに申し込んで來ていた。常陸夫人は多くの求婚者の中でこれは人物に欠点が少ない、結婚すれば不幸な娘によく同情もするであろう、風采ふうさいも上品である、これ以上の貴族は、どんなに富に寄りつく人は多いとしても、地方官の家へ縁組みを求めるはずはないのであるからと思ひ、姫君のほうへその手紙などは取り次いで、返事をするほうがよいと認める時には、書くことを教えて書かせなどしていた。夫人はひとりぎめをして、守

は愛さないでも自分は姫君の婿を命がけで大事にしてみせる、姫君の美しい容姿を知つたなら、どんな人であつても愛せずにはおられまいと思ひ立つて、八月ぐらゐと仲人<sup>なせうじん</sup>と約束をし、手道具の新調をさせ、遊戯用の器具なども特に美しく作らせ、巻き絵、螺鈿<sup>らでん</sup>の仕上りのよいのは皆姫君の物として別に隠して、できの悪いのを守の娘の物にきめて良人<sup>おとこ</sup>に見せるのであつたが、守は何の識別もできる男でなかつたからそれで済んだ。座敷の飾りになるという物はどれもこれも買い入れて、秘蔵娘の居間はそれらでいっぱい、わずかに目をすきから出して外がうかがえるくらいにも手道具を並べ立て、琴や琵琶<sup>けいこ</sup>の稽古<sup>けいこ</sup>をさせるために、御所の内教坊<sup>ないきやうぼう</sup>辺の樂師を迎えて師匠にさせていた。曲の中の一つの手事が弾<sup>ひ</sup>けたといつては、師匠に拝礼もせんばかりに守は喜んで、その人を贈り物でうずめるほどな大騒ぎをした。派手<sup>はで</sup>に聞こえる曲などを教えて、師匠が教え子と合奏をしている時には涙まで流して感激する。荒々しい心にもさすがに音楽はいいものであると知っているのであろう。こんなことを少し物を識<sup>し</sup>つた女である夫人は見苦しがつて、冷淡に見ていることで守は腹をたてて、俺<sup>わ</sup>の秘蔵子をほかの娘ほどに愛しないとよく恨んだ。

八月にと仲人から通じられていた左近少将はやつとその月が近づくと、同じことなら

月の初めにと催促をして来た時、守の実の子でなく、母である自分一人が万事氣をもんできた娘であることを言い、その真相を前に明らかにしておかねば婿になる人は、そんなことでのちに失望をすることがあるかもしれぬと思い、夫人は初めから仲へ立つていたその男を近くへ呼んで、

「今度お相手に選んでくださいました子につきましては、いろいろ遠慮がありましたね、こちらからお話を進める心はなかったのですが、前々からおっしゃってくださいますのを、先が並み並みの方でもいらつしやらないためにもつたいたなくお氣の毒に思われまして、お取り決めたのですが、お父様の今ではない方なのですから、私一人で仕度したくをしていまして、そんなことで不都合だらけでお氣に入らぬことはないかと今から心配をしています。娘は何人もありますが、保護者の父親のありまておやす子は、そのほうで心配をしてくれますことと安心していまして、この方の身の納まりだけを私はいろいろと苦勞にして考えていまして、たくさんの若い方をそれとなく觀察していたのですが、不安に思われることがどこかにある方ばかりで、結婚にまで話を進められませんでしたのに、少将さんは同情心に厚い性質だと伺いまして、こちらの資格の欠けたのも忘れてお約束をするまでになったのですが、私の大事な方を愛してくださいさらないようなことが起

こり、世間体までも悪くなることがあつては悲しいだろうと思われます」

と語った。

仲介者はさつそく少将の所へ行つて、常陸夫人の言葉を伝えた。すると少将の機嫌きげんは見る見る悪くなった。

「初めから実子でないという話は少しも聞かなかつたじゃないか。同じようなものだけれど、人聞きも一段劣る気がするし、出入りするにも家の人に好意を持たれることが少ないだろう。君はよくも聞かないでいいかげんなことを取り次いだものだね」

と少将が言うので仲人はかわいそうになり、

「私はもとよりくわしいことは知らなかつたのですよ。あの家の内部に身内の者がいるものですから話をお取り次ぎしたのです。何人もの中で最も大切にかしずいている娘とだけ聞いていましたから、守の子だろうと信じてしまったのですよ。奥さんの連れ子があるなどとは少しも知りませんでした。容貌ようぼうも性質もすぐれていること、奥さんが非常に愛していて、名誉な結婚をさせようと大事がつていられることなどを聞いたものですから、あなたが常陸家に結婚を申し込むのによいつてがないかと言つていらつしやるのを聞いて、私にはそうしたちよつとした便宜がありますとお話したのが初めです。決



していいかげんなことを言ったのではありませんよ。それは濡衣ぬれぎぬというものです」

意地が悪くて多弁な男であつたから、こんなふう息まいてくるのを聞いていて、少将は上品でない表情を見せて言うのだった。

「地方官階級の家と縁組みをすることなどは人がよく言うことでないのだが、現代では貴族の婿をあがめて、後援をよくしてくれることに見栄みえの悪さを我慢する人もあるようになったのだからね。どうせ同じようなものだとしても、世間には、わざわざ継娘まこの婿にまでなつてあの家の余沢をこうむりたがつたように見えるからね。源少納言や讃岐守さぬきのかみは得意顔で出入りするであろうが、こちらはあまり好意を持たれない婿で通つて行くのもじめなものだよ」

仲人なこうどは追従男で、利己心の強い性質から、少将のためにも、自身のためにも都合よく話を変えさせようと思つた。

「守の実の娘がお望みでしたら、まだ若過ぎるようでも、そう話をしてみましょうか。何人もの中で姫君と言わせている守の秘蔵娘があるそうです」

「しかしだね、初めから申し込んでいた相手をすっぱかして、もう一人の娘に求婚をするのも見苦しいじゃないか。けれど私は初めからあの守の人物がりっぱだから感心し

て、後援者になつてほしくて考えついた話なのだ。私は少しも美人を妻にしたいと思つてはいないよ。貴族の家の艶えんな娘がほしければたやすく得られることも知つてゐるのだ。しかし貧しくて風雅な生活を樂しもうとする人間が、しまいには墮落した行為もすることになり、人から人とも思われないようになっていくのを見ると、少々人には譏そられても物質的に恵まれた生活がしたくなる。守に君からその話を伝えてくれて、相談に乗つてくれそうなら、何もそう義理にこだわつてゐる必要もまたないのだ」

少将はこう言つた。仲人は妹が常陸家の継子ままこの姫君の女房をしている關係で、恋の手紙なども取り次がせ始めたのであつたが、守に直接逢あつたこともないのだった。

仲人はあつかましく守の住居すまいのほうへ行つて、

「申し上げたいことがあつて伺いました」

と取り次がせた。守は自分の家へ時々出入りするとは聞いているが、前へ呼んだこともない男が、何の話をしようとするのであらうと、荒々しい不機嫌ふきげんな様子を見せたが、「左近少将さんからのお話を取り次ぎますために」

と男が言わたので逢つた。仲人は取りつきにくく思うふうで近くへ寄つて、

「少将さんは幾月か前から奥さんに、お嬢さんとの御結婚の話でおたよりをしておいで

になったのですが、お許しになりました、今月にと言ってくださいったものですから、吉日を選んでおいでになりますうちに、そのお嬢さんは奥さんのお子さんであつても常陸守さんのお嬢さんでない、公達きんたちが婿におなりになつては、世間でただ物持ちの余慶をこゝうむりたいだけで結婚したと悪くばかり言われるでしょう。地方官の婿になる人は私の主君のように大事がられて、手に載せるばかりにされるのを望んで縁組みをする人たちがあるのに、さすがにその望みも貫徹されず、あまり好意をも持たれぬ一段劣つた婿で出入りをされるのはよろしくないとまあこんなふうな忠告がある人がしたのだそうです。それはその人だけでなく何人ともなく皆同じことを言つたそうで、少将さんは今どうすればいいかと煩悶はんもんをしておられます。初めから自分は実力のある後援者を得たいと思つて、それに最も適した方として選んだ家なのだ。実子でないお嬢さんがあるなどとは少しも知らなかつたのだから、初めからの志望どおりに、まだ年のお若い方が幾人かいらつしやるそうだから、そのお一人との結婚のお許しが得られたらうれしいだろう、この話を申し上げて思召おぼしめしを伺つて来いと申されたものですから」

などと言つた。常陸守は、

「そんな話の進行していたことなどを私はくわしく知りませんでした。私としては実子

と同じようにしてやらなければならない人なのですが、つまらぬ子供もおおぜいいるものですから、意気地いけじのない私は力いっぱいその者らの世話にかかっていますと、家内は自身の娘だけを分け隔てをして愛さないと意地悪く言ったりしたことがありますて、私にいつさい口を入れさせなくなった人のことですから、ほのかに少将さんからお手紙が来るということだけは聞いていたのですが、私を信頼してくださいの思召しとは知りませんでした。それは非常にうれしいお話です。私の特別かわいく思う女の子があります。おおぜいの子供の中に、その子だけは命に代えたいほどに愛されます。申し込まれる方はいろいろありますが、現代の人は皆移り気なふうになっていますから、娘に苦労をさせたくない心から、まだ相手をよう決めずにいます。どうかして不安の伴わない結婚をさせたいと、毎日そればかりを思っていました、少将様におかせられては、御尊父様の故大将様にも若くからおそば近くまいた縁もありまして、身内の者としてお小さい時からおりこうなお生まれを知っておりましたから、今もお邸やしきへ伺候もしたく思いながら、続いて遠国に暮らすことになりましたからは、京にいますうちは何をいたすもおつくうで参候も実行できませんでしたような私へ、ありがたいお申し込みをしてくださいましたことは返す返す恐縮されます。仰せどおり娘を差し上げますのは

たやすいことですが、今までの計画を無視されたように思つて家内から恨まれるという点で少しはばかられます」

とこまごまと述べた。さいさきがよさそうであると仲人なこうどはうれしく思つた。

「そんなことまでもお考えになる必要はございませんでしょう。少将さんのお心は、お母様はとにかく、お嬢さんのお父様お一人のお許しが得たいと願つていらつしやるのでして、お年は若くても御実子のお嬢様で、たいせつにあそばしていらつしやる方と御結婚の御同意が得られますことで十分満足されることでしよう。御実子でない方と連れ添つて、まがい物の婿のようになることはしたくないと仰せになりました。人物はまことにごりつばで、世間の評判もたいした方ですよ。若い公達きんだちといひましても、あの方だけは女に取り入ろうと氣どることなどはなさらない。下情にもよく通じておられます。領地は何か所もおありになるのですよ。現在の御収入は少ないようでも、貴族は家についた勢いというものがあるのですから、ただの人の物持ちになつていばつてゐるのなどその比じゃありませんとも。来年は必ず四位しゐにおなりになるでしょう。この次の蔵人頭くらうどのかみはまちがいなくあの方にあたると帝みかどが御自身でお約束になつたんですよ。何の欠け目もない青年朝臣あそんでいて妻をまだ定めきないのはどうしたことだ、しかるべく選定して後見の

しゅうと

舅を定めるがいい。自分がいる以上高級官吏には今日明日にでも上げてやろうとそう帝は仰せになるのですよ。だれよりもいちばん帝の御信任を受けていられるのはあの少将さんなのです。実際御性格だつてすぐれた重々しい人ですよ。理想的な婿君ではありませんか。幸いあちらからお話があるのですから、この場合にぐずぐずしないで話をお定めになるのが上策でしょう。実際あちらには縁談が降るほどあるのですからね。あなたの躊躇して渋つておられるのが知れましたら、ほかの口の話をお定めになるでしょう。私はただあなたのためにこの御良縁をお勧めするのですよ」

仲人が出まかせなよいことづくめを言い続けるのを、驚くほど田舎めいた心になつて  
いる守であつたから、うれしそうに笑顔えがおをして聞いていた。

「現在の御収入の少ないことなどはお話しになる要はない。私が控えている以上は、頭の上へまでもささげて大事にしますよ。決して足らぬ思いはさせません。いつまでもお尽くしすることができずに途中で私が亡なくなることがあつても、遺産の領地は一つだつてあの娘以外に与えるものではありませんから、御安心くだすつていいのです。子供はおおぜいおりますが、あの娘にだけ私は特別な愛情を持つているのです。真心をもつて愛してくださる方であれば、大臣の位置を得たく思いになり、うんと運動費を使いたく

おなりになった時にも事は欠かせますまい。現在の帝がそれほど愛護される方では、もうそれで十分で、私などが手を出す必要もないくらいのものでしよう。帝の御後見以外のものは少将さんのためにも私の女の子のためにもたいした結果になりますまい」

守<sup>かみ</sup>がおおげさに承諾の意を表したために、仲人はうれしくなつて、妹にこの事情も語らず、夫人のほうへも寄つて行かずに帰り、仲人は守<sup>かみ</sup>の言つたことを、幸福そのものをもたらしただうにして少将へ報告した。少将は心に少し田舎<sup>いなかもの</sup>者らしいことを言うとは思つたが、うれしくないこともなさそうな表情をして聞いていた。大臣になる運動費でも出そうと言つたことだけはあまりな妄想<sup>もうそう</sup>であるとおかしかった。

「それについて奥さんのほうへは話して来たかね。奥さんの考えていた人と別な人と結婚をしようというのだからね。私の利己主義からそうなつたなどと中傷をする人もあるだろうから、このことはどんなものだからね」

少し躊躇<sup>ちゆうちよ</sup>するふうを見せるのを仲人は皆まで言わせずに、

「そんな御心配は無用です。奥さんだつて今度のお嬢さんを大事にしておられるのですからね。ただいちばん年長の娘さんと、婚期も過ぎそうになっている点で、前の方のことを心配して、そちらへ話をお取り次ぎになつただけのものですよ」

と言うのであつた。今まではその人のことを特別に大事にしている娘であると言つていた同じ男の口から、にわかにかう言われるのを信じてよいかどうかからぬとは少将も思ったが、やはり利己的な考えが勝ちを占めて、一度は恨めしがられ、誹謗ひぼうはされても、一生樂々と暮らしうることは願わしいと処世法の要領を得た男であつたから、決心をして、夫人と約束をした日どりまでも変えずにその夜から常陸守ひたちのかみの娘の所へ通ひ始めることにした。

夫人は良人おつとにも言わず一人で姫君の結婚の仕度したくをして、女房の服裝を調べさせ、座敷の中などを品よく飾り、姫君には髪を洗わせ、化粧をさせてみると、少将などというほどの男の妻にするのは惜しいようで、憐あわれむべき人である、父宮に子と認められて成長していたなら、たとえ宮のお亡かくれになつたあとでも、源大将などの申し込みは晴れがましいことにもせよ、受け入れなくもなかつたはずである、しかしながら自分の心だけではこうも思うものの、ほかから見れば守の子同然に思うことであらうし、また真相を知つても私生児と見てかえつて輕蔑けいべつするであらうことが悲しいなどと夫人は思い續けていた。どうすればいいのであらう、婚期の過ぎてしまうことも幸福でない、家柄のよい無事な男が今度のように懇切に言つて來たのであるから与えるほうがいいのであらうかな



どと、結局そのほうへ心が傾いたというのも、仲人が守へ言つたと同じようなよいこと  
づくめの話に、まして女の人はやすやすと欺あざむかれたからであるかもしれぬ。もう明日あすか  
明後日あさってになつたかと思うと、心が落ち着かず忙がしく、どこにもひとところにじつとし  
ておられず夫人がいらいらとしている所へ、外から守がはいつて来て、長々と雄弁に次  
のようなことを言つた。

「私を除のけ者にしておいて、私の大事な娘の求婚者を自分の子のほうへ取ろうとあなたはしたのか、ばかばかしく幼稚な話だ。あなたのりっぱな娘さんを入り用だと思ふ公達きんだち  
はなさそうだね。卑賤な私風情ふぜいの女の子をぜひ妻にと言つてくださるので、うまく計画  
をしたつもりだろうが、それは初めの精神と違ふと言つてほかの縁談きを定めようとされ  
ていたから、それなら思召しどおりこちらの子のほうにと言つて私は定めてしまった」

何の思いやりもなく守はこの奇怪な報告を得意になつて妻へした。夫人はあきれても  
のと言われない。そんなことであつたかと思うと、人生の情けなさが一時に胸へせき上  
がつてきて涙が落ちそうにまでなつたから、静かに立つて歩み去つた。姫君の所へ行つ  
てみると、可憐かれんな美しい姿でその人はすわっていた。夫人はなんとなく安心を覚えた。

どんな運命がここに現われてきても、この人がだれよりも不遇で置かれるはずはないと

思われるのである。姫君の乳母めのとを相手に夫人は、

「いやなものは人の心だね。私は同じようにだれも娘と思つて世話をしているものの、この方と縁を結ぶ人には命までも譲りたい氣でいるのなのに、父親がないと聞いて、輕けい蔑べつをして、まだ年のゆかない、でき上がっていない子などを、この方をさしおいて娶めとるというようなことができるものなんだねえ。そんな人をまた婿にすることなどは絶対にもう私はいやだけれど、守が名譽に思つて大騒ぎしているのを見ると、それがちょうど似合ひの婿舅むじゅうとだと思われるよ。私はいつさい口を入れないつもりよ。私はこの家でない所へ当分行つていたい」

こう歎きながら言うのであつた。乳母も腹がたつてならない。姫君が輕蔑けいべつされたと思うからである。

「いいのですよ奥様。これも結局お姫様の御運が強かつたから、あの人と結婚をなさらないで済むことになったのですよ。そんな人にはこの方の価値ねうちはわかりますまい。お姫様はものの理解の正しい同情心の厚い方にお嫁とつがせいたしとうございます。源右大將様の御風采ふうさいをほのかにしか拝見いたしませんでしたが、まるで命も延びそうな氣がいたしましたよ。親切なお申し込みもあるので、御運に任せてあの方を婿君になさいま

しよ」

「まあ恐ろしい。人の話に聞くと、長い間すぐれた女性とでなければ結婚をしないと言いになって、左大臣、按察使大納言、式部卿の宮様などから婿君にいつて懇望されていらつしやつたのを無視しておいになつたあとで帝の御秘蔵の宮様を奥様におもらいになつた方だもの、どんなにすぐれたように見える人だつてほんとうに愛してくださいるものかね。あのお母様の尼宮の女房にして時々は愛してやろうとは思つてくださるだろうがね。それはごりつぱな所だけれど、そんな關係に置かれているのは苦しいものだからね。二条の院の奥様を幸福な方だと人は申しているけれど、やはり物思いのやむ間もないふうでおありになるのを見ると、どんな人でもいいから唯一の妻として愛してくださいる良人よりほかは頼もしいものないことは私自身の経験でも知っている。お亡くなりになつた八の宮様は情味のある方らしく見えて、美男で艶なお姿はしていらつたけれど、私を軽いものとしてお扱いになつたのが、どんなに情けなく恨めしかったことだつたらう。守は言語道断な情味の欠けた醜い人だけれど、私を一人の妻としてほかにほだれも愛していないことで、私は絶対な安心が得られて今日まで来ましたよ。何かの時に今度のような、ぶしつけな、愛想のないことをするのはしかたがないがね、物思い

をさせられたり、嫉妬しつとを覚えさせられたりすることもなく、よく双方で口喧嘩くちげんかはしても、しかたのないと思うことは、またよくあきらめてしまうのが私ら夫婦なのだ。高級のお役人、親王様と言われて、優美に、高雅な生活をしていらつしやる方を対象としていても、こちらに資格がなくてはつまらないものよ。すべてのことは自身の世間的価値によつて定まることなのだと思うと、この方がどこまでもかわいそうに思われるがね、どうかして人笑いにならない幸福な結婚をさせたいと思う」

二人は姫君の将来のことをいろいろと相談し合つた。  
守かみは婿取りの仕度したくを一所懸命にして、

「女房などはこちらにいいのがたくさんあるようだから、当分あちらの娘付きにさせておくがいい。帳台きたいの帛きれなども新調しただろう、にわかなことで間に合わないから、それをそのまま用いることにして、こちらの座敷を使おう」

西座敷のほうへもそんなことを言いに来て、大騒ぎに騒いでいた。夫人が感じよくさつぱりと装飾しておいた姫君の座敷へ、よけいに幾つもの屏風びょうぶを持つて来て立て、飾り棚だな、二階棚なども気持ちの悪いほど並べ、そんなのを標準にしてすべての用意のとのえられているのを、夫人は見苦しく思うのであるが、いっさい口出しをすまいと言い

切ったのであったから、傍観しているばかりであった。姫君は北側の座敷へ移っていった。

「あなたの心は皆わかってしまった。同じあなたの子なのだから、どんなに愛に厚薄はあっても、今度のような場合に打ちやりにしておけるものでないだろうと思つていたのはまちがいだつた。もういいよ。世間には母親のある子ばかりではないのだから」

と守は言い、愛嬢を昼から乳母めのとと二人で撫なでるようにして繕い立てていたから、そう醜いふうの娘とは見えなかった。今が十五、六で、背丈せたけが低く肥ふとつた、きれいな髪を持ち主で、小桂こうちぎの丈たけと同じほどの髪のすそはふさやかであった。その髪をことさら賞美して撫でまわしている守であった。

「家内がほかの計画を立てていた人をわざわざ実子の婿にせずともいいとは思つたが、あまりに人物がりつぱなもので、われもわれもと婿に取りたがるというのを聞いて、よそへ取られてしまうのは残念だつたから」

と、あの仲人なこうどの口車に乗せられた守の言っているのも愚かしい限りであつた。

左近少将もこの派手はでな舅しゅうとぶりに満足して、夫人のほうもやむをえず同意したとと解釈をし、以前に約束のしてあつた夜から来始めた。守の妻と姫君の乳母はあさましくこ

れをながめていたのであった。ひがんだようには見られまいと夫人は世話に手を貸そうとも思っていたが、それをするのも気が進まないままに、二条の院の中の君へまず手紙を送ることにした。

用事がございまして手紙を差し上げますのもなれなれしくいたしすぎることになり、失礼かと存じまして、御機嫌ごきげんはどうかと始終氣にいたしながらお尋ねも申し上げませんでした。あの方に謹慎の日がまわってまいりまして、しばらくどこかへ所を変えさせたいと思うのでございますが、そつとおそばへまいらせていただいてはどんなものでしょう。人目につかぬお部屋へやが拝借できますれば非常にうれしいことと存じます。つまり私には十分の保護もできませんで、あの方を苦しい立場に置きますことのしばしばある悲しい世でございますのに、お助け所と考えられますのはまずあなた様だけでございます。

泣きながら書かれたものであるこの手紙を、中の君は哀れと思ったが、父宮が、あくまで子とあそばさなかつた人を、父や姉の異議の聞きようのない世になつて、自分が姉きょう妹まいとしてつきあうのも氣のとがめることであるが、また自分がかまわずにおいた結果、低い女房勤めなどをするようになることも心苦しいことに思われるであろう、自分の計

らい方一つから姉妹がちりぢりになってしまふことも父宮のためにお氣の毒なことであると思ひ悩まれるのであつた。常陸夫人は<sup>ひたち</sup>大輔のところへも姫君についての心苦しさをやや強く書いて言つて來たのであつたから、

「何かわけがあることでございましょう。冷淡に斷わつておしまいになつてはいけません。ああした劣つた人から生まれた方が姉妹の<sup>きょうだい</sup>中に混じつておいでになることは、どこにも例のあることでございます。先方が無情だと思ひますような処置をおとりになつてはなりません」

などと夫人に取りなして、

それではお居間から西のほうに目だたぬ場所をこしらえましたから、いいお座敷ではありませんがごしんぼうをなさいますならばらくお預かりになろうとおっしゃいます。

と昔の<sup>ほうばい</sup>朋輩の中將へ返事をした。その人はうれしく思つてさつそく姫君を二条の院の夫人へ預ける決心をした。姫君も姉君と親しみたくてならぬ心であつたから、かえつて少將の問題が機會を作つたのを喜んだ。

常陸守は婿の少將の三日の夜の儀式をどんなふう<sup>は</sup>に派手に行なおうかと思案をしたの

であるが、高尚こうしょうなことは何もわからぬ男であつたから、ただ荒い東国産の絹を無数に投げ出し、酒肴しゅこウも座が狭くなるほどにも運び出すような歓待もてなしぶりをしたのを、卑しい従者らは大恩恵に逢あつたように思つて喜んだから、主人の少将もけつこうなことに思い、りこうな舅しゅうとの持ち方をしたと喜んだ。常陸夫人はこの儀式のある間は外へ出て行くのも意地の悪いことに思われるであらうと我慢をして、ただ父親がするまを見ている。婿君の昼の座敷、侍の詰め所というような室へやを幾つも用意するために、家は広いのであるが、長女の婿の源少納言が東の対たいを使つていたし、そのほかに男の子も多いのであるから空室あきまもなくなつた。今まで姫君のいた座敷へ四日めからは婿が住み着くことになつていては、廊座敷などという軽々しい所へ姫君を置くのはどうしても哀れでしんぼうのならぬことと夫人に思われて、考えあぐんだ末に中の君へ預けようとしたのである。だれもが八の宮の三女として姫君を見ないところから、私生児として軽蔑けいべつするのであらうと思ひ、お認めにならなかつた宮の御娘みよの女王にやうの所を選んでしいて姫君の隠れ場所にしたのであつた。

姫君には乳母めのとと若い女房二、三人がついて来た。西向きの座敷の北にあたつた所を部屋に与えられた。長い間遠く離れていた間柄ではあるが、母方の血縁のある常陸夫人で



あつたから、来た時には中の君も他人扱いにはせず、顔を見せずに隠れて話すようなこともせず、親王夫人らしい気品を持つて、若君の世話などをする様子も近く見せられるのを、わが娘に比べて常陸夫人がうらやましく思うのも哀れである。自分も八の宮夫人と家柄の懸隔のあるわけではない、叔母おばと姪めいだったのではないか、女房になつて仕えていたという点で、自分の生んだ姫君は宮の女王の一人に数えられず私生児として今度のように、露骨に人から輕侮の態度をとられることにもなつたと思う心から、こんなふうにして親しみ寄ろうとするのも悲しい心である。

その一室には物忌ものいみという札が貼はられ、だれも出入りをしなかつた。常陸夫人も二、三日姫君に添つてそこにいた。以前の訪問の時と違い、今度はこんなふうでゆるりと二条の院の生活を昔の中將は觀察することができた。

兵部卿ひょうぶきやうの宮が二条の院へおいでになつた。好奇心から常陸夫人は物の間からのぞいて見るのであつたが、宮は非常にお美しく、折つた桜の枝のような風采ふうさいをしておいでになつた。自身が信賴して、強情かうじやうで恨めしいところはあつても、機嫌きげんをそこねまいとしてゐる常陸守よりも姿も身分もずつとすぐれたような四位や五位の役人が皆おそばに来てひざまずいて、いろいろなことを申し上げたり、御意を伺つたりしていた。また年若な

五位などで、この夫人にはだれとも顔のわからぬお供も多かった。自身の継子の式部丞しきぶのじようで蔵人くらんどを兼ねている男が御所の御使みつかいになって来た。こんな役を勤めながらも、おそば近くへはよう来ない。あまりにも普通人と懸隔のある高貴さに驚いて、これは人間世界のほかから降くだつておいでになった方ではないかという気が常陸の妻にはされた。こんな方に連れ添つておいでになる中の君は幸福であると思つた。ただ話で聞いていては、どんななりっぱな方でも女に物思いをおさせになつてはよろしくないと、憎いような想像をしていた自分は誤りであつた、このお美しい風采ふうさいを見れば、七夕たなばたのように年に一度だけ来る良人おっとであつても女は幸福に思わなくてはならないなどと思つている時、宮は若君を抱いてあやしておいでになった。夫人は短い几帳きちようを間に置いてすわっていたが、その隔ての几帳びばうを横へ押しやつて話などを宮はしておいでになるのである。またもない似合わしい美貌びばうの御夫婦であると思えるのであつた。八の宮の豊かでおありにならなかつた御生活ぶりに比べて思うと、同じ親王と申し上げても恵まれぬ方、恵まれた方の隔たりはこれほどもあるものかという氣のする常陸夫人だつた。几帳の中へおはいりになつたあとでは乳母めのとなどと若君のお相手をしていた。伺候した者の集まつて来ていることが時々申し上げられても、疲れていて氣分がよろしくないと仰せになつて、夫人の室へやから宮は

お出にならなかった。お食膳しよくぜんがこちらの室へ運ばれて来た。すべてのことが氣高く高雅であつた。自身が姫君の生活に善美を尽くしていると信じていたことも、比較して見ていた目は地方官階級の趣味にほかならなかつたと常陸夫人は思うようになった。自分の姫君もこうした親王とお並べしても不似合いでない容姿を備えていると思われる。財力を頼みにして父親がお后きさきにもさせようと願っている娘たちは、同じわが子であつても全然そうした美の備わっていないことを思うと、これからは姫君の良人を謙遜けんそんして選ぶ必要はない、自重心を持たなければならぬと一晩じゅういろいろな空想を常陸夫人はし続けた。

朝おそくなつてから宮はお起きになり、病身になつておいでになる中宮ちゅうぐうがまた少しお悪いとお聞きになつて御所へまいろうとされ、衣服を改めなどしておいでになつた。心が惹かれてまた常陸夫人がのぞくと、正しく装束をされたお姿はまた似るものもないほど氣高くお美しい宮は、若君へお心が残るやうにいろいろとあやしておいでになる。粥かゆ、強飯こわいなどを召し上がり、この西の対からお車に召されるのであつた。今朝けさからまいついて控え所のほうにいた人々はこの時になつてお縁側へ出て来て何かと御挨拶あいさつを申し上げたりしている中に、氣どつたふうを見せながら平凡でおもしろみのない顔を

し、直衣のうしに太刀たちを佩はいているのがあった。宮のおいになる前では目にもとまらぬ男であつたが、

「あれがあの常陸守の婿の少将じゃありませんか。初めはあの姫君の婿にと定められていたのに、守かみの娘をもらつてかばつてもらおうという腹で、女にもでき上がっていない子供を細君にしたのですよ。そんなことをこちらなどで噂うわさする者はありませんがね、守の邸やしきに知つた人があつて私はその事情を知つているのですよ」

とほかの一人にささやいている女房があつた。常陸の妻が聞いているとは知らずにこんなことの言われているのにもその人ははつとして、少将を相当な風采ふうさいをした男と認めた以前の自身すらも、残念に腹だたく、あの男と結婚をさせれば姫君の一生は平凡なものになつてしまうのであつたと思ひ、あれ以来軽蔑けいべつはしているのであつたが、いつそうその感を深くする常陸の妻であつた。若君が這はい出して御簾みすの端からのぞいているのに宮はお気づきになつて、またもどつておいでになつた。

「中宮様の御気分がよろしいようだったら早く退出して来よう。まだお苦しいふうな御容体だったら今夜は宿直とくのちしよう。この人がいては一晩でもほかにいる間は気がかりで苦しくてならない」

こう女房へお言いになりながらしばらく若君をお慰めになってから出てお行きになる宮の御様子は見ても見ても飽くことのないほどお美しかったのが、行つておしまいになったあとに物足りなさとし寂しさを常陸夫人は感じた。

昔の中将が言葉を尽くして宮の御容姿をほめたたえているのを聞いていて、夫人はこの人も田舎<sup>いなか</sup>びたものであると思つて笑つていた。

「奥様にお別れになりましたのはお生まれになったばかりでございましたから、どうおなりあそばすことかとわれわれも不安でなりませんでしたし、宮様も御心配あそばしたものでございますが、あなた様は御幸運を持つてお生まれになったものですから、宇治のような山ふところでごりつぱにお育ちになったのでございます。ほんとうに残念でございます。大姫君のお亡<sup>かく</sup>れになりましたことはあきらめきれません」

などと泣きながら常陸の妻は言う。中の君も泣いていた。

「人生が恨めしくばかり思われて心細い時にも、また生きていれば少し慰みになる時もあった、そんなおりおりに、生まれた時にお別れしたお母様のことは、そうした運命だったのだからと、お顔を知らないのだからあきらめはつくのだけれど、お姉様のことはいつも生きていくのだすつたらと思われて悲しいですよ。大將さんが今でもまだど

んなことにも心の慰められることがないとお悲しみになるほどの、深い愛をお姉様に持っておいでになったことがわかと、いつそうお死になつたのが残念でね」

と中の君は言つた。

「大將様はあんなに、例もないほど婿君として帝が<sup>みかど</sup>お大事にあそばすために、御驕慢<sup>きようまん</sup>になつてそんなふうなこともお言いになるのではありますまいか。大姫君が生きておいでになつても、そのために宮様との御結婚をお断わりあそばすとも思われませんもの」

「まあお姉様だつて、だれもが逢<sup>あ</sup>つているような悲しい目は見えていらつしやるだらうからね。かえつて先にお死になつてよかつたかもしれない。すべてを見てしまわないためによい想像ばかりをしておられるようなものだと思ふけれどね。でもね大將はどういう宿縁があるのか怪しいほど昔の恋を忘れずにおいでになつてね、お父様の後世<sup>ごせ</sup>のことまでもよく心配してくだすつて仏事などもよく親切に御自身の手でしてくださるのですよ」

と中の君は、感謝している心を別段誇張もせずに常陸夫人へ語つて聞かせた。

「お亡<sup>かく</sup>れになつた姫君の代わりにほしいと、物の数でもございません方のことさえも宇治の弁の尼からお言わせになりましてございます。私はそんなだいそれたことは考えも

いたしませんが『紫の一本ゆゑに』（むさし野の草は皆がら哀れとぞ思ふ）と申しますように、大姫君の妹様というだけでお思いになるのかとおそれおおい申しようですが、哀れに思われますほどな真心な恋をなすたのでございますね」

などと常陸夫人は話したついでに、姫君を将来どう取り扱っていいかと煩悶（はんもん）しているということ泣く泣く中の君へ訴えた。細かに言つたのではないが、二条の院の女房らの間にまで噂（うわさ）をされるようになっていゝことであるからと思ひ、左近少将が輕蔑（けいべつ）したことなどをほのめかして言つた。

「私の命のございます間は、ただお顔を見るだけを朝夕の慰めにして、そばでお暮らしさせるつもりでございますが、死にましたあとは不幸な女になつて世の中へ出て苦勞をおさせすることになるかと思ひますのが悲しくて、いつそ尼にして深い山へお住ませすることにすれば、人生への慾（よく）は忘れてしまふことになつてよろしかろうなどと、考えあぐんでは思ひついたりもいたします」

「ほんとうに氣の毒なことだけれどそれは一人だけのことでなく父を亡（な）くした人は皆そうよ。それに女は独身で置いてくれないのが世の中の慣（なら）いで一生一人でいるようにとお父様が定（き）めておいでになつた私でさえ、自分の意志でなしにこうして人妻になつていゝ

のだから、まして無理なことですよ。尼にさせることもあまりにきれいで惜しい人ですよ」

中の君が姉らしく言うのを聞いて常陸夫人は喜んでいた。年はいっているが、いばできれいな顔の女であった。肥り過ぎたところは常陸さんと言われるのになつてゐた。

「お亡くなりになりました宮様が子としてお認めくださらなかったために、みじめな方はいっそうみじめなものになつて、人からもお侮られになると悲しがつておりましたが、あなた様へお近づきいたしますのをお許しくださいませ、御親切な身のふり方で御心配くださいますことで、昔の宮様のお恨めしさも慰められます」

そのあとで常陸さんはあちらこちらと伴われて行つた良人の任国の話をし、陸奥の浮嶋の身にしむ景色なども聞かせた。

「あの『わが身一つのうきからに』（なべての世をも恨みつるかな）というふう悲しんでばかりいました常陸時代のことと詳しくお話し申し上げることもいたしまして、始終おそばにまいていた心になりましたけれど、家のほうではわんぱくな子供たちのおおぜいが、私のおりませんのを寂しがつて騒いでいることかと思ひますと、さすがに



気が落ち着きません。ああした階級の家へはいつてしまいましたことで、私自身も情けなく思うことが多いのでございますから、この方だけはあなた様の思召しにお任せいたしますから、どうとも将来のことをお定めくださいまし」

この常陸夫人の頼みを聞いて、中の君も、この人の言うとおりの妹は地方官級の人の妻などにさせたくないと思っていた。姫君は容貌ようぼうといい、性質といい憎むことのできぬ可憐な人であった。ひどく恥ずかしがるふうも見せず、感じよく少女らしくはあるが機智きちの影が見えなくはない。夫人の居室に侍している女房たちに見られぬように、上手に顔の隠れるようにしてすわっていた。ものの言いようなども総角あけまきの姫君に怪しいまでよく似ているのであった。あの人型ひとがたがほしいと言った人に与えたいとその人のことが中の君の心に浮かんだちょうどその時に、右大将の入来を人が知らせに來た。居室にいた女房たちはいつものように几帳きちょうの垂れ絹たを引き直しなどして用意をした。姫君の母は、「では私ものぞかせていただきましょう。少しお見かけしただけの人が、たいへんにおほめていましたけれど、こちらの宮様のお姿とは比較すべきではございますまい」

と言っていたが、女房たちは、

「さあ、どうでしょう。どちらがおすぐれになつていらつしやるか私たちにはきめられ

ませんわね」

こんなことを言う。中の君が、

「二人で向かい合っていていらっしゃるのを見た時、宮はうるおいのない醜いお顔のようにお見えになった。別々に見れば優劣はない方がたのように見えるのだけれど、美しい人というものは一方の美をそこねるものだから困るのね」

と言うと、人々は笑って、

「けれど宮様だけはおそこなわれにならないでしょう。どんな方だつて宮様にお勝ちになる美貌びぼうを持つておいでになるはずはございませんもの」

などと言うころ、客は今下車するのであるらしく、前駆の人払いの聲がやかましく立てられていたが、急には薫かゐるの姿がここへ現われては来なかった。

待ち遠しく人々が思うところに縁側を歩んで来た大將は、派手はでな美貌というのではなしに、艶えんで上品な美しさを持つていて、だれもその人に羞恥しゅうちを覚えさせられぬ者はなく、知らず知らず額髪も直されるのであった。貴人らしく、この上なく典雅な風采ふうさいが薫かゐるには備わっていた。御所から退出した帰り途みちらしい。前駆の者がひしめいている気配けはいがここにも聞こえる。

「昨晚中宮がお悪いということ聞きまして、御所へまいってみますと、宮様がたはどなたも侍しておられないので、お気の毒に存じ上げてこちらの宮様の代わりに今まで御所にいたのです。今朝けさも宮様のおいになるのがお早くなかったので、これはあなたの罪でしょうと私は解釈していたのですよ」

と大將は言った。

「ほんとうに深いお思いやりをなさいますこと」

夫人はこう答えただけである。宮が御所にとどまっておいでになるのを見てこの人はまた中の君と話したくなって来たものらしい。

いつものようになつかしい調子で薫は話し続けていたが、ともすればただ昔ばかりが忘れなくて、現在の生活に興味の持たれぬことを混ぜて中の君へ訴えようとするのであった。この人の言っているように長い時間を隔ててなお恋の続いているわけではない、これは熱愛するようにその昔に言い始めたことであつたから、忘れていぬふうを装うのではないかと女王にょおうは疑つてもみたが、人の心は外見にもよく現われてくるものであるから、しばらく見ているうちに、この人の故人への思慕の情が岩木でない人にはよくわかるのであった。この人を思う心も縷々るると言われるのに中の君は困っていて、恋の心をや

めさせる襖みぞぎをさせたい気にもなったか、人型ひとがたの話をしだして、

「このごろはあの人、そつとこの家うちに来ています」

とほのめかすと、男もそれをただごととして聞かれなかった。牽引力けんりきよくのそこにもあるのを覚えたが、にわかにならへ恋を移す氣にこの人はなれなかった。

「でもその御本尊が私の願望を皆受け入れてくださるのであれば尊敬されますがね。いつも悩まされてばかりいるようでは、信仰も続きませんよ」

「まあ、あなたの信仰ってそれくらいなのです」

ほのかに中の君の笑うのも薫には美しく聞かれた。

「では完全に私の希望をお伝えください。御自身の一時のがれの口実だと伺っていると、あとに何も残らなかった昔のことが思い出されて恐ろしくなります」

こう言つてまた薫は涙ぐんだ。

見し人のかたしろならば身に添へて恋しき瀬々のなでものにせん

これを例の冗談じやうだんにして言い紛らわしてしまった。

「みそぎ河瀬<sup>かは</sup>々にいさんなでものを身に添ふかげとたれか頼まん

『ひくてあまたに』（大ぬさの引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ）とか申すようなことで、出過ぎたことですが私は心配されます」

「『つひによるせ』（大ぬさと名にこそ立てれ流れてもつひの寄る瀬はありけるものを）はどこであると私が思っていることはあなたにだけはおわかりになるはずですし、その話のほうのははかない水の泡<sup>あわ</sup>と争って流れる撫物<sup>なでもの</sup>でしかないのですから、あなたのお言葉のようにたいした効果を私にもたらししてくれもしないでしょう。私はどうすれば空虚になった心が満たされるのでしょうか」

こんなことを言いながら薫が長く帰って行こうとしないのもうるさくて、中の君は、「ちよつと泊りがけでまいっている客も怪しく思わないかと遠慮がされますから、今夜だけは早くお帰りくださいまし」

と言ひ、上手<sup>じょうず</sup>に帰りを促した。

「ではお客様に、それは私の長い間の願いだったことを言ってくだすって、にわかな思いつきの浅薄な志だと取られないようにしていただければ、私も自信がついて接近して行

けるでしょう。恋愛の経験の少ない私には、女性の好意を求めに行くようなことなどは今さら恥ずかしくてできなくなっています」

薫はこう頼んで帰って行った。姫君の母は薫をりっぱだと思い、理想的な貴人である  
と心でほめて、乳母めのとが左近少将への復讐ふくしゅうとして思いつき、たびたび勧めたのを、あるま  
じいことだと退けていたが、あの風采ふうさいの大将であれば、たまさかな通い方をされても忍  
ぶことができよう、自分の娘は平凡人の妻とさせるにはあまりに惜しい美が備わってい  
るのに、東国の野蛮な人たちばかりを見て来た目では、あの少将をすら優美な姿と見て  
婿にも擬してみた、くちおしいまでも破れた以前の姫君の婚約者のことをこの女は  
思うようになった。

よりかかっていた柱にも敷き物にも残った薫のにおいのかんばしさを口にしては誇張  
したわざとらしいことにさえなるであろうと思われる。おりおり見る人さえもそのたび  
ごとにほめざるを得ない薫であったのである。

「お経をたくさん読んだ人に、その報いの現われてくることの書いてある中に、芳香を  
身体からだに持つということを最高のものに仏様が書いておありになるのも道理だと思われま  
すね。薬王品やくおうぼんなどにも特にそれが書いてありますね。牛頭梅檀ごずせんだんの香とかこわいような名

だけれど、私たちは大将様にお近づきできることで仏様のお言葉に嘘うそのないことをわかっていただきました。御幼少の時から仏勤めをよくあそびましたからよ」

「でもこの世だけの信仰の結果とは思われませんね。どんな前生を持っていらいっしょだったのか、それが知りたくなりますわ」

などとも言つて口々にほめるのを、常陸夫人ひたちは知らず知らず微笑して聞いていた。中の君はそつと薫に託された話をした。

「一度お思いになったことは執拗しつようなほどにもお忘れにならない、まれな頼もしい性質だね。それは今はまあ御新婚された時などで、めんどろが多い気もあなたはするでしょうけれど、あなたが尼にさせようかなどとも思つておいでになるのなら、その気で試みてごらんになったらどう」

「つらい思いも味わわせず、人に軽蔑けいべつもさせたく思いません心から、鶏とりの声も聞こえませぬような僧房住まいをおさせる気になっていたのですが、大将さんをはじめてお見上げして、ああした方にはたとえ下仕えしもにでも御奉公できますことは生きがいがあることと思われましてございます。年のいった者でもそう思うのですから、まして若い人はあの方に好感を持つことだろうと思われましますものの、相手がごりつばであればあるだけ

卑下がされて、物思いの種を心に蒔<sup>ま</sup>かせることになりはしないでしょうかと苦勞に考えられます。身分の高低にかかわらず、女というものはねたましがらせられることで、この世のため、未来の世のために罪ばかりを作ることになるものだと思いますと、それがかわいそうでございます。しかし何も皆あなたの思召<sup>おぼしめ</sup>し次第でございます。どんなにでもお定め<sup>き</sup>になつて、お世話をくださいませ」

と常陸夫人の言うのを聞いていて、中の君は重い責任を負わされた気がして、「今までの親切な心を知っているだけで将来のことは私に保証ができないのだから、そう言われるとどうしてよいかわからない」

と歎息をしたままでその話はしなくなつた。

夜が明けると車などを持って来て、常陸守の帰りを促す腹だたしげな、威嚇<sup>いかく</sup>的な言葉を使いが伝えたため、

「もつたいないことですが、万事あなた様をお頼みに思わせていただきまして、あの方をお手もとへ置いてまいります。『いかならん巖<sup>いはい</sup>の中に住まばかは』（世のうきことの聞こえござらん）とばかり苦しんでおります間だけを隠してあげてくださいませ。哀れな人と御覽くださいまして、教えられておりませんことをお教えくださいませ」



などと、昔の中将の君は夫人に泣きながら頼んでおいて帰って行こうとした。姫君は母に別れていたこともない習慣から心細く思うのであったが、はなやかな貴族の家庭にしばらくでも混じって行けるようになったことはさすがにうれしかった。

常陸夫人の車の引き出されるころは少し明るくなっていたが、ちょうどこの時に宮は御所からお帰りになった。若君に心がお惹かれになるために御微行の体で車なども例のようではなく簡単なのに召しておいでになったのと同じく、常陸家の車は立ちどまり、宮のお車は廊に寄せられてお下りになるのであった。だれの車だろう、まだ暗いのに急いで出て行くではないかと宮は目をおとめになった。こんなふうにして人目を忍んで通う男は帰って行くものであると、御自身の経験から悪い疑いもお抱きになった。「常陸様がお帰りになるのでございます」

と、出る車に従った者は言った。

「りっぱなさまだね」

と若い前駆の笑い合っているのを聞いて、常陸の妻は、こんなにまで懸隔のある身分であつたかと悲しんだ。ただ姫君のために自分も人並みな尊敬の払われる身分がほしいと思った。まして姫君自身をわが階級に置くことは惜しい悲しいことであるといよいよ

この人は考えるようになった。

宮は夫人の居間へおはいりになって、

「常陸さんという人があなたの所へ通っているのではないか、艶えんな夜明けに急いで出て行った車付きの者が、なんだかわざとらしいこしらえ物のようだった」

まだ疑いながらお言いになるのであった。人聞きの恥ずかしい困ったことをお言いになると思い、

「大輔たゆうなどの若いころの朋輩ほうばいは何のはなやかな恰好かつこうもしていませんのに、仔細しさいのありそうにおっしゃいますのね。人がどんなに悪く解釈するかもしれないようなことにわざとしてお話しなさいます。『なき名は立てで』（ただに忘れね）」

と言つて、顔をそむける夫人は可憐かれんで美しかった。そのまま寢室やすに宮は朝おそくまで寢やすんでおいでになったが、伺候者が多数に集まって来たために、正殿のほうへお行きになった。

中宮ちゆうぐうの御病気はたいしたものでなくすぐ快くおなりになったことにだれも安心して、まいっていた左大臣家の子息たちなどもごいっしょに碁いんふたぎを打ち韻塞いんふたぎなどしてこの日を暮した。

夕方に宮が西の対へおいでになった時に、夫人は髪を洗っていた。女房たちも部屋へそれぞれはいつて休息などをしていて、夫人の居間にはだれというほどの者もいなかった。小さい童女を使いにして、

「おりの悪い髪洗いではありませんか。一人ぼっちで退屈をしていなければならぬ」と宮は言っておやりになった。

「ほんとうに、いつもはお留守の時に済ませるのに、せんだつてうちはおつくうがりになってあそばさなかつたし、今日が過ぎれば今月に吉日はないし、九、十月はいけないことになるしと思って、おさせしたのですがね」

と大輔は気の毒がり、若君も寝ていたのでお寂しかろうと思い、女房のだれかれをお居間へやった。

宮はそちらこちらと縁側を歩いておいでになったが、西のほうに見馴れぬ童女が出ていたのにお目がとまり、新しい女房が来ているのであろうかとお思いになって、その座敷を隣室からおのぞきになった。間の襖子の細めにあいた所から御覧になると、襖子の向こうから一尺ほど離れた所に屏風が立ててあった。その間の御簾に添えて几帳が置かれてある。几帳の垂れ帛が一枚上へ掲げられてあつて、紫苑色のはなやかな上に淡黄

の厚織物らしいのの重なった袖口そでぐちがそこから見えた。屏風の端が一つたたまれてあったために、心にもなくそれらを見られているらしい。相当によい家から出た新しい女房なのであろうと宮は思召して、立つておいでになった室へやから、女のいる室へ続いた庇ひさしの間あひの襖子をそつと押しあけて、静かにはいつておいでになったのをだれも気がつかずにいた。

向こう側の北の中庭の植え込みの花がいろいろに咲き乱れた、小流れのそばの岩のあたりの美しいのを姫君は横になつてながめていたのである。初めから少しあいていた襖子をさらに広くあけて屏風の横から中をおのぞきになったが、宮がおいでになろうなどとは思ひも寄らぬことであつたから、いつも中の君のほうから通つて来る女房が来たのであるうと思ひ、起き上がったのは、宮のお目に非常に美しくうつて見える人であつた。例の多情なお心から、この機会をはずすまいとあそばすように、衣服の裾すそを片手でお抑おさえになり、片手で今はいつておいでになった襖子を締め切り、屏風の後ろへおすわりになった。

怪しく思つて扇を顔にかざしながら見返つた姫君はきれいであつた。扇をそのままにさせて手をお掬とらえになり、

「あなたはだれ。名が聞きたい」

とお言いになるのを聞いて、姫君は恐ろしくなった。ただ戯れ事の相手として御自身は顔を外のほうへお向けになり、だれと知れないように宮はしておいでになるので、近ごろ時々話に聞いた大將なのかもしれない、においの高いのもそれらしいと考えられることによつて、姫君ははずかしくてならなかった。乳母は何か人が来ているようなのがいぶかしいと思い、向こう側の屏風を押しあけてこの室へはいつて来た。

「まあどういたしたことでございましょう。けしからぬことをあそばします」

と責めるのであつたが、女房級の者に主君が戯れているのとがめ立てさるべきことでもない宮はしておいでになるのであつた。はじめに御覧になつた人なのであるが、女相手にお話をあそばすことの上手な宮は、いろいろと姫君へお言いかけになつて、日は暮れてしまつたが、

「だれだと言つてくれない間はあちらへ行かない」

と仰せになり、なれなれしくそばへ寄つて横におなりになつた。宮様であつたと氣のついた乳母は、途方に<sup>とらふ</sup>くれてぼんやりとしていた。

「お明りは<sup>とうろう</sup>燈籠にしてください。今すぐ奥様がお居間へおいでになります」

とあちらで女房の言う声がした。そして居間の前以外の格子はばたばたと下ろおされていた。この室は別にして平生使用されていない所であつたから、高い棚たな厨子なづし一具が置かれ、袋に入れた屏風なども所々に寄せ掛けてあつて、やり放しな座敷と見えた。こうした客が来ているために居間のほうからは通路に一間だけ襖子があけられてあるのである。そこから女房の右近という大輔たゆうの娘が来て、一室一室格子を下ろしながらこちらへ近づいて来る。

「まあ暗い、まだお灯あかりも差し上げなかつたのでございますね。まだお暑苦しいのに早くお格子を下ろしてしまつて暗闇くらやみに迷うではありませんかね」

こう言つてまた下ろした格子を上げている音を、宮は困つたように聞いておいでになつた。乳母もまたその人への体裁の悪さを思つていたが、上手に取り繕うこともできず、しかも気がさ者の、そして無智むちな女であつたから、

「ちよつと申し上げます。ここに奇怪なことをなさる方がございますの、困つてしまひまして、私はここから動けないのでございますよ」

と声をかけた。何事であらうと思つて、暗い室へ手探りではいると、桂姿うちぎすがたの男がよい香をたてて姫君の横で寝ていた。右近はすぐに例のお癖を宮がお出しになつたのである

うとさとった。姫君が意志でもなく男の力におさえられておいでになるのである。と想像されるために、

「ほんとうに、これは見苦しいことでございます。右近などは御忠告の申し上げようもございませんから、すぐあちらへまいりまして奥様にそつとお話をいたしましょう」

と言って、立って行くのを姫君も乳母もつらく思ったが、宮は平然としておいでになって、驚くべく艶美な人である、いったい誰なのであるうか、右近の言葉づかいによつても普通の女房ではなさそうであると、心得がたくお思いになって、何ものであるかを名のろうとしない人を恨めしがつていろいろと言つておいでになった。うとましいというふうも見せないのであるが、非常に困つていて死ぬほどにも思っている様子が哀れで、情味をこめた言葉で慰めておいでになった。

右近は北の座敷の始末を夫人に告げ、

「お気の毒でございます。どんなに苦しく思つていらつしやるでしょう」

と言うと、

「いつものいやな一面を出してお見せになるのだね。あの人のお母さんも軽佻なことをなさる方だと思ふようになるだろうね。安心していらつしやいと何度も私は言つておい

たのに」

こう中の君は言つて、姫君を憐れむのであつたが、どう言つて制しにやつていいかわからず、女房たちも少し若くて美しい者は皆情人にしておしまいになるような悪癖がありになる方なのに、またどうしてあの人のいることが宮に知られることになつたのであろうと、あさましさにそれきりものも言われない。

「今日は高官の方がたくさん伺候なすつた日で、こんな時にはお遊びに時間をお忘れになつて、こちらへおいでになるのがお遅くなるのですものね、いつも皆奥様なども寝んでおしまいになつていますわね。それにしてもどうすればいいことでしょう。あの乳母が気のききませんことね。私はじつとおそばに見えて、宮様をお引つ張りして来たいようにも思いましたよ」

などと右近が少将という女房といつしよに姫君へ同情をしている時、御所から人が来て、中宮が今日の夕方からお胸を苦しがつておいであそばしたのが、ただ今急に御容体が重くなつた御様子であると、宮へお取り次ぎを頼んだ。

「あやにくな時の御病氣ですこと、お氣の毒でも申し上げてきましょう」

と立つて行く右近に、少将は、



「もうだめなことを、憎まれ者になつて宮様をお威しするのはおよしなさい」と言つた。

「まだそんなことはありませんよ」

このささやき合いを夫人は聞いていて、なんたるお悪癖であらう、少し賢い人は自分をまであさましく思つてしまふであらうと歎息をしていた。

右近は西北の座敷へ行き、使いの言葉以上に誇張して中宮の御病氣をあわただしげに宮へ申し上げたが、動じない御様子で宮はお言いになった。

「だれが来たのか、例のとおりにたいそうに言つておどすのだね」

「中宮のお侍の平の重常たいら しげつねと名のりましてございます」

右近はこう申した。別れて行くことを非常に残念に思召されて、宮は人がどう思つてもいいという氣になつておいでになるのであるが、右近が出て行つて、西の庭先へお使いを呼び、詳しく聞こうとした時に、最初に取り次いだ人もそこへ来て言葉を助けた。

「中務なかつかさの宮もおいでになりました。中宮大夫もただ今まいられます。お車の引き出されます所を見てまいりました」

そうしたように発作的にお悪くおなりになることがおりおりあるものであるから、嘘うそ

ではないらしいと思召すようになった宮は、夫人の手前もきまり悪くおなりになり、女へまたの機会を待つことをこまごまと言ひ残しになってお立ち去りになった。

姫君は恐ろしい夢のさめたような気になり、汗びつたりになっていた。乳母は横へ来て扇であおいだりしながら、

「こういう御殿というものは人がざわざわとしていまして、少しも気が許せません。宮様が一度お近づきになった以上、ここにおいでになってよいことはございませんよ。まあ恐ろしい。どんな貴婦人からでも嫉妬しとをお受けになることはたまらないことですよ。全然別な方にお愛されになるとも、またあとで悪くなりましてそれは運命としてお従いにならないかもしれません。宮様のお相手におなりになつては世間体も悪いことになろうと思ひまして、私はまるで蝦蟇がまの相になつてじつとおにらみしていますと、気味の悪い卑しい女めと思召して手をひどくおつねりになりましたのは匹夫の恋のようで滑稽こっけいに存じました。お家うちのほうでは今日もひどい御夫婦喧嘩げんかをあそばしたそうですよ。ただ一人の娘のために自分の子供たちを打ちやつておいて行つた。大事な婿君のお来始めになつたばかりによそへ行っているのは不都合だなどと、乱暴なほどに守はお言いになりましたので、下しもの侍でさえ奥様をお氣の毒だと言つていました。こうしたいろいろな

ことの起こるのも皆あの少将さんのせいですよ。利己的な結婚沙汰ざたさえなければ、おりおり不愉快なことはありまして、まずまず平和なうちに今までどおりあなた様もおいでなれたのですがね」

歎息をしながら乳母はこう言うのであった。

姫君の身にとつては家のことなどは考える余裕もない。ただ闖入者ちんにゅうしゃが来て、経験したこともない恥ずかしい思いを味わわされたについても、中の君はどう思うことであろうと、せつなく苦しくて、うつ伏しになつて泣いていた。見ている乳母は途方に暮れて、「そんなに可悲しがりになることはございませんよ。お母様のない人こそみじめで悲しいものなのですよ。ほかから見れば父親のない人は哀れなものに思われますが、性質の悪い継母ままははに憎まれているよりはずっとあなたなどはお楽なのですよ。どうかよろしいように私が計はらいますからね、そんなに気をめいらせないでおいでなさいませ。どんな時にも初瀬はせの観音がついてあなたを守つておいでになりますからね、観音様はあなたをお憐あわれみになりますよ。お参りつけあそばさない方を、何度も続けてあの山へおつれ申しましたのも、あなたを輕蔑けいべつする人たちに、あんな幸運に恵まれたかと驚かす日に逢あいたいと念じているからでしたよ。あなたは人笑われなふうでお終わりになる方なものです

か」

と言い、樂觀させようと努めた。

宮はすぐお出かけになるのであった。そのほうが御所へ近いからであるのか西門のほうを通ってお行きになるので、ものをお言いになるお声が姫君の所へ聞こえてきた。上品な美しいお声で、恋愛の扱われた故い詩を口ずさんで通ってお行きになることで、煩わしい気持ちを姫君は覚えていた。お替え馬なども引き出して、お付きして宿直を申し上げる人十数人ばかりを率いておいでになった。

中の君は姫君がどんなに迷惑を覚えていることであろうとかわいそうで、知らず顔に、

「中宮様の御病氣のお知らせがあつて、宮様は御所へお上がりになりましたから、今夜はお帰りが無いと思います。髪を洗ったせいですが、気分がよくなってじっとしていますが、こちらへおいでなさい。退屈でもあるでしょう」

と言わせてやった。

「ただ今は身体が少し苦しくなっておりますから、癒りましてから」

姫君からは乳母を使いにしてこう返事をして来た。どんな病氣かとまた中の君が問い

にやると、

「何ということはないのですが、ただ苦しいのでございます」

とあちらでは言った。少将と右近とは目くばせをして、夫人は片腹痛く思うであろうと言っているのは姫君のために気の毒なことである。

夫人は心で残念なことになった、薫が相当熱心になつて望んでいた妹であつたのに、そんな過失をしたことが知れるようになれば軽蔑するであろう、宮という放縦なことを常としていられる方は、ないことにも疑念を持ちうるさくお責めにもなるが、また少々悪いことがあつてもぜひもないようにおあきらめになりそうであるが、あの人はそうでなく、何とも言わないままで情けないことにするのであるうのを思うと、妹はどんなに気恥ずかしいことかしれぬ、運命は思いがけぬ憂苦を妹に加えることになった、長い間見ず知らずだった人なのであるが、逢つて見れば性質も容貌もよく、愛せずにはいられなくなつた妹であつたのに、こんなことが起こつてくるとはなんたることであろう、人生とは複雑にむずかしいものである、自分は今の身の上に満足しているものではないが、妹のような辱しめもあるいは受けそうであつた境遇にいたにもかかわらず、そうはならず正しく人の妻になりえた点だけは幸福と言わねばなるまい、もう自分は薫が恋

をさえ忘れてくれて、以前の友情でつきあつて行けることになれば、何も深く憂えずに暮らす女になろうと思つた。多い髪であるから、急にはかわかしきれずにすわつていねばならぬのが苦しかった。白い服を一重だけ着ている中の君は繊細きんせで美しい。

姫君はほんとうに身体が苦しくなつていたのであるが、乳母は、

「そんなふうにしておいでになつては、痛くない腹をさぐられます。何か事のあつたように女王様にようさまはお願いになつていらつしやるかもしれませんから、ただおおうなふうにしてあちらへいらつしやいませ。右近さんなどには事実を初めからお話しいたしますよ」

と言ひ、しいて促し立てておき、夫人の居室いままの襖子からかみの前へまで行き、

「右近さんにちよつとお話しいたしたいことが」

と言つた。出て来たその人に、

「御冗談じようだんをなさいました方様のために、お姫様は驚いて気もお失いになるばかりなのですよ。ほんとうのひどい目にでもおあいになった人のように苦しいふうをお見せになるのでお気の毒でなりません。奥様から慰めてあげていただきたいと私はお願いに出たのでございます。過失もなさいませんでしたのに、恥ずかしくてならぬように思召すのも

お道理でございますよ。異性のことがよくわかっておいでになる方であれば、これは何でもないことだとおわかりになるのでしょうか、そうでないところに純粹なところも持っていていらっしゃるのだと拝見しています」

と言っておき、姫君を引き起こして夫人の所へ伴って行くのであった。人のするままに任せて、他人がどんな想像をしているだろうと思うことに羞恥しゅうちは覚えるのであるが、柔らかなおおよう過ぎたほどの性質の人であつたから、乳母に押し出されて夫人の居間の中へはいった。額髪などの汗と涙でひどく濡ぬれたのを隠したく思い、灯あかりのほうから顔をそむけた姫君は、夫人をこれ以上の美人はないと常にながめている女房たちが見て、劣おとつたふうもなく、貴女きじよらしく美しい、宮がの方をお愛しになるようになったら氣まきずいことを見ることになろう、これほどの人でなくても、新しい人をお喜びになる宮の御性質であるからと、夫人に侍していた二人ほどの女房は、姫君の隠しきれない顔を見て思っていた。中の君はなつかしいふうで話していて、

「あなたの家と違つた所だところを思わないでいらつしやいよ。お姉様がお亡かれになつてから、私は姉様のことばかりが思われて、忘れることなどは少しもできなくてね、自分の運命ほど悲しいものはないと思つて暮らしていたのですがね、あなたという姉様に

よく似た人を見ることができるようになって、ずいぶん慰められてますよ。私にはほかにあなたのような妹はないのですから、お父様の御愛情を私から受け取る気になつてくだすつたらうれしいだろうと思います」

などとも夫人は語るのであったが、宮から愛のささやきをお受けした心のひけ目がある上に、よい環境に置かれていなかった人は、姉君に応じて何もものが言えないというふうがあつて、

「長い間とうていおそばなどへまいれるものでないと思つていましたのに、こんなに御親切にいろいろとしていただけるのですもの、どんなことも皆慰められる気がいたします」

とだけ、少女らしい声で言った。夫人が絵などを出させて、右近に言葉書きを読ませ、いっしょに見ようとすると、姫君は前へ出て、恥じてばかりもいず熱心に見いだした灯影ひかげの顔には何の欠点もなく、どこも皆美しくきれいであつた。清い額つきがにおうように思われて、おおような貴女きじよらしきには総角あげまきの姫君がただ思い出されるばかりであつたから、夫人は絵のほうはあまり目にとめず、身にしむ顔をした人である、どうしてこうまで似ているのであらう、大姫君は宮に、自分は母君に似ていると古くからいる



女房たちは言っていたようである、よく似た顔というものは人が想像もできぬほど似ているものであると、故人に思い比べられて夫人は姫君を涙ぐんでながめていた。故人は限りもなく上品で気高く<sup>けだか</sup>ありながら柔らかな趣を持ち、なよなよとしすぎるほどの姿であった。この人はまだ身のこなしなどに洗練の足らぬところがあり、また遠慮をすぎるせいか美しい趣は劣って見える、重々しいところを加えさせるようにすれば大将の妻の一人になっても不似合いには見えまいなどと、姉心になって気もつかっている中の君であった。話し合って夜明け近くまでなってから寝<sup>やす</sup>んだのであるが、夫人はそばへ寝させて、父宮についてお亡<sup>かく</sup>れになるまでの御様子などを、ことごとくではないが話して聞かせた。聞けば聞くほど恋しく、ついにお逢いすることがなく終わったことをくやしく悲しく姫君は思った。

昨夜のできごとを知っている女房たちは、

「実際はどんなことだったのでしょうか、おかわいらしいお顔をしていらつしやるあの方を、奥様はあんなに大事にしておいでになっても、もう泥土<sup>でいど</sup>に落ちた花ではありませんか、気の毒な」

と一人が言うのを、右近は、

「そこまでは進まなかったのでしょうか。あの乳母ばあやが私をつかまえて、放すものかというようにもしてこぼしていた話にも、そこまでも行つた御冗談じょうだんだったとは言つてませんでしたよ。宮様も近づきながら恋を成り立たせえなかったような意味の詩を口ずさんでおいでになりましたもの。けれどもそれはわざとそうお見せになろうとするためか私は知りませんよ」

やや釈明的にも言い、二人は姫君に同情した。

乳母めのとは車の拝借を申し出て常陸ひたち様の所へ歸つて行つた。常陸夫人に昨夜のことを報告するとはっと驚いたふうが見えた。女房たちもけしからぬことだと言ひもし、思いもするであろう、夫人はまたどんなふうに思うことか、嫉妬しつとの憎しみというものは貴婦人も何もいっしょなのであるからと、自身の性情から一大事のように思い、じつとはしておられず、その夕方に二条の院へまいつた。宮のおいでにならぬ時であつたから常陸の妻は気安く思い、

「まだ幼稚なところの改まりません方をおそばへ置いてまいりましたものですから、あなた様にお任せして安心はさせていただいていながら、気がかりでならぬような思いもいたされまして、いっこう落ち着いてもいられないふうでいますものですから、下品な

人たちに腹をたてられたり、怨うらまれたりもいたしましてございます」

と昔の中将の君は言いだした。

「そんなにあなたが言うほど幼稚な人でもないのに、気がかりでならぬように言つて興奮しておいでになるから、私はおこられるのではないかと心配ですよ」

と笑つた夫人の眼つきの氣品の高さにも常陸の妻は心の鬼から親子を恥知らずのように見られている氣がした。胸の中ではどんなに口惜しがつておいでになるかもしれぬと思うと、あの問題には触れていくことができないのであつた。

「こうしておそばへ置いていただきますことは、長い間の念願のかないました氣が私もしまして、世間の人に聞かれましても、あの人の名譽になることと存じますが、しかし考えますれば、あまりにも無遠慮なことでございます。尼にして深い山へ入れてしまいましたほうが賢明ないたし方だったのでしようが」

と言つて泣くのも中の君にはかわいそうで、

「ここにお置きになつて、何もあなたが氣がかりに思ふ必要はないのですよ。十分のこととはできなくても、私が愛していないのなら不安は不安でしょうが、そうではありませんよ。悪い癖をお出しになる方が時々ここへはおいでになるけれど、女房たちだって皆

知っていて警戒をしますから、あの人の迷惑になるようにはしないだろうと思いますけれど、あなたはどんな想像をしておいでになるの」

こう言っていた。

「あなた様の御愛情を疑うということは決してございません。昔の宮様があの方を子にしてくださいませんでしたことも、あなたへお恨みする筋はないのでございます。それは別にいたしましても、あなた様と私とは血縁があるのでございますから、それだけでおすがりもいたすのでございます」

などと真心を見せて言ったあとで、

「明日と明後日<sup>あす あさって</sup>があの方のために大事な謹慎日なのでございますが、こういったしましたお出入りの人の多い所でない場所でその間を過ごさせまして、またおつれいたしました」

と常陸夫人は言い、姫君をつれて行こうとするのであった。中の君はこれを本意<sup>ほんい</sup>ないことに思ったが、とめることはできなかった。あのできごとに心の乱れている女であったから、あまり長く話もせず去った。

姫君のための何かの場合に使おうと思い、この人は家をかねて一つ用意させてあつ

た。三条辺でしゃれた作りの家なのであるが、まだまったくはでき上がっていない、行き渡った装飾がされているのでもなかった。

「あなた一人で苦勞が尽きない。薄命な自分などは、明日というようなものを頼みにせず早く死んでおればよかったのですよ。自分だけは生まれた家にもふさわしくない地方官の家の中にはいつて、一生をしんぼうもしよう、ただあなたをそうした人と同じように扱わせることが忍ばれないことに思われましてね、お姉様をおたよらせしてやったのですが、醜いことがそこで起こればいつそう世間体の恥ずかしいことになります。いやなことですよ。不都合な家でもこの家に隠れていらつしやい。だれにも知れないようにしてね、私はどんなにでもしてあなたのためによくしてあげますから」

こう言い置いて常陸の妻は娘のところから帰ろうとした。姫君は泣いて、生きているだけでさえ人迷惑な自分らしいと氣をめいらせているのがかわいそうに見えた。親の心にはまして不憫で、もつたいないほど美しいこの人を、その価値にふさわしい結婚がさせたいと思う心から、二条の院のできごとのようなことが噂になり、その名の傷つけられるのを残念がっているのであった。聡明な点もある女ながらすぐ腹をたてるわがままなところも持つ女なのである。守の本宅のほうにも隠して住ませておくことはできた

のであるが、そうしたみじめな起居おきふしはさせたくないとして別居をさせ始めたのであって、生まれてからずっといっしょにばかりいた母と子であるため、双方で心細く思い、悲しがっているのである。

「ここはまだよくでき上がっていないで、危険でもある家ですからね、よく気をおつけなさい。宿直とくいをする侍のことなども私はよく命じておきましたけれど、まったく安心はできない。でも家のほうで腹をたてたり、恨んだりする人がありますから帰りますよ」  
泣く泣く母は帰って行った。

婿むこの少将の歓待を最も大事なことでしている守かみは、妻がいっしょに家にいてしないのを怒るのである。夫人は不愉快で、この少将のために姫君の身に災難も降りかかることになったと、だれよりも愛する子のことであつたから、反感ばかりがその男に持たれて、気を入れた世話などはできなかつた。二条の院の宮の御前でみすばらしく見た時から輕蔑けいべつする氣になった夫人であつたから、姫君の婿として大事に扱ってみたいなどと好意を持ったことは忘れていた。家ではどんなふうに見えるであろう、まだ自家の中で打ち解けた姿をしているところを自分は見なかつたと思ひ、少将がくつろいでいる昼ごろに今では守かみの愛嬢の居室いままに使われている西座敷へ来て夫人は物蔭ものかげからのぞいた。柔らか

い白綾しろあやの服の上に、薄紫の打ち目のきれいにできた上着などを重ねて、縁側に近い所へ、庭の植え込みを見るために出てすわっている姿は、決して醜い男だとは見えない。娘は未完成に見える若さで、無邪気に身を横たえていた。母の目には兵部卿ひょうぶきやうの宮が夫人と並んでおいでになった時の華麗さが浮かんできて、どちらもつまらぬ夫婦であると思つた。そばにいる女房じやうだんらに冗談じやうだんを言っている余裕のある様子などをながめていると、この間のように美しい気けもない男とは見えないため、二条の院でのぞいた時の他少将であつたかと思う時も、

「兵部卿の宮のお邸やしきの萩はぎはきれいなものだよ。どうしてあんな種があつたのだろう。同じ花でも枝ぶりがなんというよさだったろう。この間伺つた時にはもうすぐお出かけになる時だったから折つていただいて来ることができなかったよ。その時『うつろはんことだに惜しき秋萩に』』というのを歌いになった宮様を若い人たちに見せたかつたよ」と言うではないか。そして少将は自身でも歌を作っていた。あの利己心をなまましく見せた時のことを思うと人とも見なされない男で、はなはだしく幻滅を感じさせた男に、ろくな歌はできるはずもないと母はつぶやかれたのであるが、そうまでも軽蔑してしまうことのできぬふうはさすがにしているため、どう答えるかためそうと思ひ、

しめゆひし小萩が上もまよはぬにいかなる露にうつる下葉ぞ

と取り次がせてやると、少将は姑を氣の毒に思つて、

「宮城野の小萩がもとと知らませばつゆも心を分かずぞあらまし

そのうち自身でこの申しわけをさせていただきましよう」

と返事を伝えさせた。八の宮のことを聞いて知つたらしいと思うと、いつそうその娘が大事に思われ、どうして他の子などといつしよに扱われようと考えられる母であつた。理由もなくこの時に薫の面影が目に見えてきて、心の惹かれる思いがした。同じように美貌びぼうでおりになるとは宮を思つたが、こうした憧憬どうけいを持つて思うことはできない。娘を侮つて無法に私室ちんにゅうへ闖入あそばされた方であると思うとくちおしいのである。

大將は娘に興味を持つておいでになりながら直接に恋の手紙を送ろうともせず、表面はあくまで素知らぬ顔で通しているのも階級的な差別に因もとづくと思われるのはつらいがりっぱな態度であるなどと、母親は薫にばかり好感の持たれる自分を認め、若い姫君は



まして二人の貴人を比較して見て大将に心の傾くことであらうと思われる。姫君の婿にしようなどと少将のような無価値な男を思ったことが自分にあつたのが恥ずかしいなどと母は姫君についての物思いばかりをし続け、ああもして、こうもなつてとよいほうへと空想を進めるのであつたが、また反省してみても、自分の願いは実現が困難なことである、あの高貴さと、あの風采ふうさいの備わつた大将は、もつともつと資格の完全な人を愛するはずである、顧みられる価値が姫君にあるかどうかは疑わしい。世間を見ると、容貌と性情は尊卑の階級によつて自然に備わるものらしい。自分の子供たちの中に、だれ一人姫君に近い容貌ようぼうを持つ者がいないではないか、少将は家ではすぐれた美男のように良人おつとなどは見、自分ももとはそう思つていたのが、兵部卿の宮とお見くらべした時に、つまらなさを知つたということからでも推理していくことができるのである。現代の帝王の御秘蔵の内親王を妻にしている人の、いま一人の妻に姫君を擬してみるのには恥ずかしいと、こんなことを考えていくと、しまいには頭も茫ぼうとしてくるのであつた。

仮り住居ずまいにいる姫君は退屈していた。庭の草も目ざわりになるばかりできたないし、東国なまりの男たちばかりが出入りする人影であつたし、慰めになる花はなかつたし、落ち着かぬ所に晴れ晴れしからず暮らしている若い姫君の心には、宮の夫人が恋しく思

われてならなかった。闖入ちんげうしておいになつた宮の御様子もさすがに思い出されて、内容はこのまごともわからなかつたものの身にしむお話しぶりであるといふと自分へお告げになつたことがあつた、お歸りになつたあとで周囲に残つていたかんばしいにおいがまだ今も自分の身に残つてゐる氣がして、恐ろしい思いをしたことさえ姫君は追想された。母のほうからはしみじみと情のこもつた手紙が送つて來られた。こんなにも愛してくれる母に心配ばかりをかける自身の運命が悲しくて姫君は泣いてしまつた。

馴なれないあなたの日送りはどんなにつれづれかと思ひます。しばらくしんぼうをしていらつしやい。

とも書かれてあつた、返事に、

退屈なことなどはなんでもありません。かえつて今が氣樂でよいという氣もします。

ひたぶるに嬉うれしからまし世の中にあらぬ所と思はましかば

と姫君は書いた。この歌の幼稚な表現にも母の夫人はほろほろと泣いて、こんなに漂ささ泊ら人いびとのようにさせておく親の無力さが悲しくなり、

うき世にはあらぬ所を求めても君が盛りを見るよしもがな

歌らしくもないこんな歌をよみ、親子はそうした贈答を心の慰めにした。

例年のように秋のふけて行くころになれば、寝ざめ寝ざめに故人のことばかりの思われて悲しい薫は、御堂みどうの竣成したしらせがあつたのを機に宇治の山莊へ行つた。かなり久しく出て来なかつたのであつたから、山の紅葉もみじも珍しい気がしてながめられた。毀つたあとへ新たにできた寢殿は晴れ晴れしいものになつていたのであつた。簡素に僧のようになに八の宮の暮らしておいでになつた昔を思うと、その方の恋しく思われる薫は、改築したことさえ後悔される気になり、平生よりも愁うれわしいふうであたりをながめていた。当時の山莊の半分は寺に似た気分が出ていたが、半分は繊細に優しく女王にょおうたちの住居すまいらしく設備しつちわれてあつたのを、網代屏風あじろびょうぶというような荒々しい装飾品は皆薫の計らいで御堂の坊のほうへ運ばせてしまい、そして風雅な山莊に適した道具類を別に造らせて、ことさら簡素に見せようともせず、きれいに上品な貴人の家らしく飾らせてあつた。小流れのそばの岩に薫は腰を掛けていたが、その座は離れにくかつた。

絶えはてぬ清水しみずになどかなき人の面影をだにとどめざりけん

と歌い、涙をふきながら弁なげしの尼へやの室のほうへ来た薫を、尼は悲しがって見た。座敷の長押なげしへ仮からだのように身体を置いて、御簾みすの端を引き上げながら薫は話した。弁の尼は几帳きちようで姿を包んでいた。薫は話のついでに、

「あの話の人ね、せんだって二条の院に来ていられると聞いていましたがね、今さら愛を求めに歩く男のようなことは私にできなくて、そのままにしていますよ。やはりこの話はあなたから言ってくださるほうがいい」

人型ひとがたの姫君のことを言いだした。

「この間あのお母様から手紙がまいりました。謹慎日の場所を捜しあぐねて、あちらこちらとお変わらせしていますってね。そして現在もみじめな小家などにお置きしているのがおかしいそうなのですが、もう少し近い所ならお住ませするのにそちらは最も安心のできる所と思いますが、荒い山路やまみちが中にあることを思うと躊躇ちゆうちゆうがされて実行ができませんと、こんなことを書いて来ておりました」

「私だけはだれも皆恐ろしがるその山道をいつまでも飽かずに出て来る人なのですなね。」

どんな深い宿縁があつてのことかと思うのは身にしむことですよ」

例のように薫は涙ぐんでいた。

「ではその小さい簡単な家というのへ手紙をやってください。あなた自身で出かけてくれませんか」

と言う。

「あなた様の御用を勤めますことは喜んでいたしますが、京へ出ますことはいやでございましてね、二条の院へさえ私はまだ伺わないのでございます」

「いいではありませんか、いちいちあちらへ報告されるのであれば遠慮もいるでしょうが、愛宕山あたごにこもった上人しやうにんも利生方便りしやうほうべんのためには京へ出るではありませんか。仏へ立てた誓いを破った人の願いのかなうようにされることも大功德くどくじゃありませんか」

「でも『人わたすことだになきを』（何をかもながらの橋と身のなりにけん）と申しますような老朽した尼が、ある事件に策動したという評判でも立ちましてはね」

と言ひ、弁が躊躇して行こうとしないのを、

「ちようどそんな仮住みをしているのは都合がよいというものですから、そうしてください」

例の薫のようでもなくしいて言い、

「明後日<sup>あさって</sup>あたりに車をよこしましょう。そして仮住居の場所を車の者へ教えておいでください。私が訪ね<sup>たず</sup>て行くことがあつても無法なことなどできるものではないから安心なさい」

と微笑しながら言うのを弁は聞いていて、迷惑なことが引き起こされるのではなからうかと思ひながらも、大將は浮薄な性質の人ではないのであるから、自分のためにも慎重に考えていてくれるに違ひないという氣になつた。

「それでは承知いたしました。お邸<sup>やしき</sup>とは近いのでございますから、そちらへお手紙を持たせておつかわしくくださいませ。平生行きません所へそのお話を私が独断<sup>ひとりぎめ</sup>で来てするよゝに思われますのも、今さら伊賀刀女<sup>いがとうめ</sup>（そのころ媒介をし歩いた種類の女）になりましたようできまりが悪うございます」

「手紙を書くことはなんでもありませんがね、人はいろいろな噂<sup>うわさ</sup>をしたがるものですかね、右大將は常陸守<sup>ひたちのかみ</sup>の娘に恋をしているというようなことが言われそうで危険<sup>けんのん</sup>ですよ。その常陸の旦那<sup>だんな</sup>は荒武者なんだってね」

と薫が言つたので弁は笑つたが、心では姫君がかわいそうに思われた。

暗くなりかかったので大將は歸つて行くのであつた。林の下草の美しい花や、紅葉を折らせた薫は夫人の宮にそれらをお見せした。りっぱな方なのであるが敬遠した形で、良人らしい親しみを薫は持たないらしい。帝からは普通の父親のように始終尼宮へお手紙で頼んでおいでになるのもあつて、薫は女二の宮をたいせつな人にはしていた。宮中、院の御所へのお勤め以外にまた一つの役目がふえたように思われるのもこの人に苦しいことであつた。

薫は弁に約束した日の早朝に、親しい下級の侍に、人にまだ顔を知られていぬ牛付き男をつれさせて山莊へ迎えに出した。莊園のほうにいる男たちの中から田舎者らしく見えるのを選んでつけさせるように薫は命じてあつた。

ぜひ出てくるようにとの薫の手紙であつたから、弁の尼はこの役を勤めることが氣恥ずかしく、氣乗りもせず思いながら化粧をして車に乗った。野路山路の景色を見ても、薫が宇治へ来始めたところからのことばかりがいろいろと思われ、総角の姫君の死を悲しみ続けて目ざす家へ弁は着いた。簡単な住居であつたから、氣樂に門の中へ車を入れ、自身の来たことをついて来た侍に言わせると、姫君の初瀬詣ではせもの時に供をした若い女房が出て来て、車から下りるのを助けてくれた。

つまらぬ庭ばかりをながめて日を送っていた姫君は、話のできる人の来たのを喜んで居間へ通した。親であつた方に近く奉公した人と思うことで親しまれるのであるらしい。

「はじめてお目にかかりました時から、あなたに昔の姫君のお姿がそのまま残っていますことで、始終恋しくばかりお思いするのですが、こんなにも世の中から離れてしまいました身の上では兵部卿ひょうぶきやうの宮様のほうへも伺いにくくてまいれませんほどで、ついお訪ねもできないのでございました。それなのに、右大將が御自分のためにぜひあなたへお話を申しに行けとやかましくおっしゃるものですから、思い立つて出てまいりました」

と弁は言った。姫君も乳母めのともりつばな風采ふうさいを知っていた大將であつたから、まだあの話を忘れずに続けて申し込んでくれることに喜びは覚えたのであるが、こんなに急に策を立てて接近しようと薫がしていたことには気づかない。

夜の八時過ぎに宇治から用があつて人が来たと言つて、ひそかに門がたたかれた。弁は薫であろうと思つているので、門をあけさせたから、車はずつと中へはいつて来た。家の人は皆不思議に思つていると、尼君に面会させてほしいと言ひ、宇治の莊園の預か



りの人の名を告げさせると、尼君は妻戸の口へいぎつて出た。小雨が降っていて風は冷ややかに室の中へ吹き入るのといっしょにかんばしいかおりが通つてきたことによつて、来訪者の何者であるかに家の人は気づいた。だれもだれも心ときめきはされるのであるが、何の用意もない時であるのに、あわてて、どんな相談を客は尼としてあつたのであろうと言ひ合つた。

「静かな所で、今日までどんなに私が思い続けて来たかということもお聞かせしたいと思つて来ました」

と薫は姫君へ取り次がせた。どんな言葉で話に答えていけばよいかと心配そうにしてゐる姫君を、困つたものであるというように見ていた乳母が、

「わざわざおいでになつた方を、庭にお立たせしたままでお帰しする法はございませんよ。本家の奥様へ、こうこうでございますとそつと申し上げてみましょう。近いのですから」

と言つた。

「そんなふうに騒ぐことはありませんよ。若い方どうしがお話をなさるだけのことです、そんなにもが進むことですか。怪しいほどにもおあせりにならない落ち着いた方

ですもの、人の同意のないままで恋を成立させようとは決してなさいませうまい」

こう言つてとめたのは弁の尼であつた。雨脚あめあしがやややはげしくなり、空は暗くばかりなつていく。宿直とんの侍が怪しい語音ごいんで家の外を見まわりに歩き、

「建物の東南のくずれている所があぶない、お客の車を中へ入れてしまふものなら入れさせて門をしめてしまつてくれ、こうした人の供の人間に油断ができないのだよ」

などと言ひ合つてゐる声の聞こえてくるようなことも薫にとつて気味の悪いはじめての経験であつた。「さののわたりに家もあらなくに」（わりなくも降りくる雨か三輪さき崎）などと口ずさみながら、田舎いなかめいた縁の端にいたのであつた。

さしとむるむぐらやしげき東屋あづまやのあまりほどふる雨そそぎかな

と言ひ、雨を払うために振つた袖の追い風のかんばしさには、東国の荒武者どもも驚いたに違ひない。

室内へ案内することをいろいろに言つて望まれた家の人は、断わりようがなくて南の縁に付いた座敷へ席を作つて薫かおるは招じられた。姫君は話すために出ることを承知しな

かつたが、女房らが押し出すようにして客の座へ近づかせた。遣戸やりどというものをしめ、声の通うだけの隙すきがあけてある所で、

「飛驒ひだの匠たくみが恨めしくなる隔てですね。よその家でこんな板の戸の外にすわることなどはまだ私の経験しないことだから苦しく思われます」

などと訴えていた薫は、どんなにしたのか姫君の居室いのほうへはいってしまった。

人型ひとがたとしてほしかつたことなどは言わず、ただ宇治で思いがけぬ隙間すきまからのぞいた時から恋しい人になったことを言い、これが宿縁しゆくゑんというものか怪しいまで心が惹ひかれていくということをやさやいた。可憐かれんなおおような姫君に薫は期待のはずれた気はせず深い愛を覚えた。

そのうち夜は明けていくようであつたが、鶏とりなどは鳴かず、大通りに近い家であつたから、通行する者がだらしない声で、何とかとか、有る名でないような名を呼び合つて何人もの行く物音がするのであつた。こんな未明まひらの街で見る行商人などというものは、頭へ物を載せているのが鬼のようであると聞いたが、そうした者が通つて行くらしいと、泊まり馴なれない小家に寝た薫はおもしろくも思つた。宿直とどした侍も門をあけて出て行く音がした。また夜番をした者などが部屋へやへ寝にはいったらしい音を聞いてから、

薫は人と呼んで車を妻戸の所へ寄せさせた。そして姫君を抱いて乗せた。家の人たちはだれも皆結婚の翌朝のこうしたことをあつけないように言つて騒ぎ、

「それに結婚に悪い月の九月でしょう。心配でなりません、どうしたことでしょう」

とも言うのを、弁は氣の毒に思い、

「すぐおつれになるなどとは意外なことに違いありませんが、殿様にはお考えがあることでしよう。心配などはしないほうがいいですよ。九月でも明日が節分になっていきますから」

と慰めていた。この日は十三日であつた。尼は、

「今度はごいっしょにまいらないことにいたしましょう。二条の院の奥様が私のまいたことをお聞きになることもあるでしょうから、伺わないわけにはまいりません。そつと来てそつと歸つたなどとお思われましても義理が立ちません」

と言ひ、同行をしようとしないのであつたが、すぐに中の君に今度のことを聞かれるのも心恥ずかしいことに薫は思い、

「それはまたあとでお目にかかつてお詫<sup>わ</sup>びをすればいいではありませんか。あちらへ行つて知っている者がそばにいないでは心細い所ですからね。ぜひおいでなさい」

と薫はいつしよにここを出ていくように勧めた。そして、

「だれかお付きが一人来られますか」

と言ったので、姫君の始終そばにいる侍従という女房が行くことになり、尼君はそれといっしよにばいじよう陪乗した。姫君の乳母めのとや、尼の供をして来た童女なども取り残されて茫然ぼうぜんとしていた。

近いどこかの場所へ行くことかと侍従などは思っていたが、宇治へ車は向かっているのであった。途中で付け変える牛の用意も薫はさせてあった。河原を過ぎてほうしやうじ法性寺のあたりを行くころに夜は明け放れた。若い侍従はほのかに宇治で見かけた時から美貌びぼうな薫に好意を持っていたのであるから、だれが見て何と言おうとも意に介しない覚悟ができていた。姫君ははなはだしい衝動を受けたあとで、失心したようにうつ伏しになっていたのを、

「石の多い所は、そうしていれば苦しいものですよ」

と言い、薫は途中から抱きかかえた。薄物の細長を中に掛けて隔ては作ってあったが、はなやかに出た朝日の光に前方も後方もあらわに見えるようになってからは、弁は自身の尼姿が恥じられるとともに、薫を良人おとことして大姫君のいで立って行くこうした供

をする日を期していたにもかかわらず、その女王は亡くなつてしまい、長生きをした咎に意外な姫君と薫の同車する片端にることになつたと思われることで悲しくなり、隠そうとするのであるが悲しい表情の現われて、泣きもするのを侍従は憎らしがった。縁起を祝う結婚の初めに、尼姿で同車して来たのさえ不都合であるのに、涙目まで見せるではないかと蔑んだ。弁の感情がどう細かに動いているかも知らず、老人は泣き虫であるからしかたがないと思うからである。薫も姫君を愛すべき人とは見ているのであるが、秋の空の気配にも昔の恋しさがつのり山を深く行くに従つて霧が立ち渡っているように視野をさえぎる涙を覚えた。外をながめながら後ろの板へよりかかつていた薫の重なつた袖が、長く外へ出ていて、川霧に濡れ、紅い下の単衣の上へ、直衣の縹の色がべつたり染まつたのを、車の落とし掛けの所に見つけて薫は中へ引き入れた。

かたみぞと見るにつけても朝霧の所せきまで濡るる袖かな

この歌を心にもなく薫が口に出したのを聞いていて尼は袖を絞るほどにも涙で濡らしていた。若い侍従は奇怪な現象である、うれしいはずの晴れの旅ではないかと不快がつ

ていた。おさえ切れぬらしい弁の忍び泣きの声を聞いていて、自身も涙をすすり上げた薫は、新婦がどう思うことであらうと心苦しくなつて、

「長い間この路みちを通つて行つたものだと思うと、なんということなしに身にしむものが覚えられますよ。少し起き上がつてこの辺の山の景色けしきなども御覧なさい。あまりに引つ込んでばかりいるではありませんか」

と、慰めるように言つて、しいて身体からだを起こさせると、姫君は美しい形に扇で顔をさし隠しながら、恥ずかしそうにあたりを見まわした目つきなどは総角あけまきの姫君を思い出させるのに十分であつたが、おおように過ぎてたよりないところがこの人にはあつて、あぶなつかしい気がされなくもなかつた。若々しくはありながら自己まもを護る用意の備わつた人であつたのをこれに比べて思うことによつて、昔を思う薫の悲しみは大空をさえもうずめるほどのものになつた。

山莊へ着いた時に薫は、その人でない新婦を伴つて来たことを、この家にとまつてゐるかもしれぬ故人の霊に恥じたが、こんなふうには体面も思わぬような恋をすることになつたのはだれのためでもない、昔が忘れられないからではないかなどと思ひ續けて、家へはいつてからは新婦をいたわる心でしばらく離れていた。女は母がどう思うであろ

うと歎かわしい心を、艶えんな風采ふうさいの人からしんみりと愛をささやかれることに慰めて車から下りて来たのであった。

尼君は主人たちの寢殿の戸口へは下りずに、別な廊のほうへ車をまわさせて下りたのを、それほど正式にせずともよい山荘ではないかと薫は思ったのであった。莊園のほうからは例のように人がたくさん来た。薫の食事はそこから運ばれ、姫君のは弁の尼が調じて出した。山中の途みちは陰気であつたが山荘のながめは晴れ晴れしかった。自然の川をも山をも巧みに取り扱った新しい庭園をながめて、昨日までの仮住居ずまいの退屈さが慰められる姫君であつたが、どう自分を待遇しようとする大將なのであろうとその点が不安でならなかった。薫は京へ手紙を書いていた。

未完成でした仏堂の装飾などについて、いろいろ指図さしずを要することがありまして、昨夜はそれに時を費やし、また今日はそれを備えつけるのに吉日でしたから、急に宇治へ出かけたのでした。ここまで来ますと疲れが出ましたのとともに、謹慎日であることに気がついたものですから、明日までずっと滞留することにしようと思ひます。

というような文意で、母宮へも、夫人の宮へも書かれたのである。

部屋着になつて、直衣のうし姿の時よりもっと艶えんに見える薫のはいつて来たのを見ると、



姫君は恥ずかしくなったが、顔を隠すこともできずそのままだった。母の夫人の作らせた美服をいろいろと重ねて着ているが、少し田舎風なところが混じって見えるのにも、昔の恋人が着古したものを着ながらも貴女らしい艶なところの多かったことの思い出される薫であった。姫君の髪すその裾はきわだつて品よく美しかった。女二の宮のお髪ぐしのすばらしさにも劣らないであろうと薫は思った。そんなことから、この人をどう取り扱うべきであろう、今すぐに妻の一人としてどこかの家へ迎えて住ませることは、世間から非難を受けることであろうし、そうかといって他の侍妾じしやうらといっしょに女房並みに待遇しては自分の本意にそむくなどと思われて心を苦しめていたが、当分は山莊へこのまま隠しておこうと思うようになった。しかし始終逢うことができないでは物足らず寂しいであろうと考えられ、愛着の覚えられるままにこまやかに将来を誓いなどしてその日を暮らした。八の宮のことも話題にして、昔の話もこまごまと語って聞かせ、戯れもまた言ってみるのであったが、女はただ恥ずかしがってばかりいて、何も言わぬのを物足らず薫は思ったが、欠点らしくは見えても、こうしたたよりないところのあるのは、よく教育していけばよいのである、田舎風いなかに洒落しやれたところができていて、品悪く蓮葉はすづばであれば、人型ひとがたもまた無用とするかもしれないのであると思い直しもした。山莊に備えつけて

あつた琴や十三絃げんを出させて、こうしたたしなみはましてないであろうと残念な氣のする薫は一人で弾ひきながら、宮がお亡かくれになったのち、この家で樂器などというものに久しく手を触れたことがなかったと、自身の爪音つまおとさえも珍しく思われ、なつかしい絃聲を手探りで出し、目は昔の夢を見るように外へ注いでいるうちに、月も出てきた。宮の琴の音は、音量の豊かなものではなかったが、美しい声が出て身にしむところがあつたと思ひ、

「あなたが宮様もお姉様もおいでになつたところに、ここで大人おとなになつていたら、あなたの価値はもつとりつぱになつていたでしょうね。宮様の御様子は子でない私でさえ始終恋しく思ひ出されるのですよ。どうしてあなたは遠い国などから長く歸れなかつたのだらう」

薫のこう言うのを恥ずかしく聞いて、手で白い扇をもてあそびながら横たわっている姫君の顔色は、透くように白くて、艶えんな額髪あけまきの所などが総角の姫君をよく思ひ出させ、薫は心の惹ひかれるのを覺えた。ほかの教育はともかく、こうした音楽などは自分の手で教えて行きたいと薫は思ひ、

「こんなものを少しやってみたことがありますか。吾わが妻つまという琴などは弾いたでしょ

う」

などと問うてみた。

「そうしたやまと言葉も使い馴れないのですもの、まして音楽などは」

姫君はこう答えた。機智きちもありそうには見えた。この山莊きやうに置いて、思いのままに來て逢うことのできないのを今すでに薰は苦痛と覚えるのは深く愛を感じているからなのであろう。樂器は向こうへ押しやって、「楚王台上夜琴聲そわうだいじやうのよるのきんせい」と薰が歌い出したのを、姫君の上に描いていた美しい夢が現実のことになったように侍従は聞いて思っていた。その詩は前の句に「斑女はんによけい閨中秋扇色いちゆうしゅうせんのかいしき」という女の悲しい故事の言われてあることも知らない無学さからであつたのであろう。悪いものを口にしたと薰はあとで思った。

尼君のほうから菓子などが運ばれてきた。箱の蓋ふたへ楓かえでや蔦つたの紅葉もみじを敷いてみやびやかに菓子の盛られてある下の紙に、書いてある字が明るい月光で目についたのを、よく読もうと顔を寄せているのが、食欲が急に起こったように他からは見えておかしかった。

やどり木は色変はりぬる秋なれど昔おぼえて澄める月かな

と古風に書かれてある歌の心に、薫は羞恥しゅうちを覚え、哀れも感じて、

里の名も昔ながらに見し人の面おもがはりせる閨ねやの月かげ

返事ともなくこう口ずさんでいたのを、侍従が弁の尼へ伝えたそうである。

## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---